

### 【実践編③】

## 伝統行事を「自分たちの探究」へ再創造する

### ～「シビックプライド」を育む、学校文化とカリキュラムの融合～

安芸郡熊野町は、全国一の生産量を誇る「熊野筆」の産地として知られています。この「筆の都」に位置する熊野中学校では、長年続く伝統行事である組曲「筆の都 くまの」の創作活動を核に、地域と深く関わる探究的な学びを展開しています。

かつては「こなす」ことが目的になりがちだった学校行事を、生徒が「なぜ受け継ぐのか」を問い直す探究の場へと転換。さらに、第1学年から系統的に地域課題に向き合う単元を配置することで、生徒たちの地域への誇り(シビックプライド)を育てています。



# 1. 取組のポイントと経緯

～「伝統だからやる」からの脱却 伝統行事を「探究」の場へアップデート～

## (1) 伝統行事の形骸化への危機感

熊野中学校には、町内の「筆まつり唄」や「筆踊り」をベースに、和太鼓、篠笛、吹奏楽、書道、踊りを融合させた約 30 分間の総合芸術、組曲「筆の都 くまの」という伝統があります。20 年以上受け継がれてきたこの活動は、生徒たちにとって「あこがれ」であり「誇り」でした。

しかし、一昨年度(令和5年度)の振り返りの中で、一つの課題が浮き彫りになりました。それは、活動が「芸術的完成度」を追求するあまり、教員主導の指導になりがちで、生徒自身が「なぜやるのか」を深く考える探究的な学びになっていないのではないか、という懸念でした。

「先輩たちがやってきたからやる」「先生に言われた通りに動く」といった受け身の姿勢が見られ、その背景にある地域文化への理解や、自分たちが表現する意味への意識が希薄になっていたのです。「伝統だからやる」という思考停止(形骸化)を防ぎ、活動を「あたりまえ」にしない。そのために、熊野中学校は「伝統的な学校行事の変革」に踏み切りました。

## (2) 「教わる」から「創る」への転換

昨年度(令和6年度)の大きな変革点は、取り組み方を「活動・体験重視」から「探究重視」へとシフトしたことです。具体的には、これまで全校生徒で行っていた取り組みを2・3年生中心とし(1年生は別の地域探究を実施)、リーダーや小グループを中心とした生徒主体の運営へと切り替えました。

また、単に演じるだけでなく、自分たちの代の「想い」を込め、表現を再構成するプロセスを重視しました。目指したのは、生徒自身が「なぜ、私たちはこの組曲を受け継ぎ、表現するのか」を問い直し、自分たちの手で新たな価値を吹き込む「再創造」のプロセスです。

## 2. 改革のポイント

### (1) 指導の在り方をゼロから見直す

伝統行事を変えることは、容易ではありません。当初、職員室には戸惑いの空気が漂っていました。

「生徒に任せて、本番までに間に合うのか？」「伝統を壊すことになるのではないか？」

そんな不安を払拭したのは、「先生が探究しないと、子どもは探究しない」という意識でした。教師が正解を持って指導する「ティーチャー」から、生徒と共に悩み、学び、伴走する「ファシリテーター」へと変わる覚悟を決めたのです。

まず動いたのは教師でした。地域の人々のもとを訪ねて歴史を聞き取り、組曲に込められた意味を学び直しました。

「この歌には、こんな思いが込められていたんだ」「こんなにも前から受け継がれてきたんだ」

教師自身が発見し、目を輝かせる姿は、生徒に伝播します。「先生も本気だ」。その空気が、生徒のスイッチを入れました。

指導のスタイルも一変しました。「もっと腕を上げて！」と形を教えるのではなく、「この場面で、観客に何を伝えたい？」と問いかける。生徒が答えに詰まれば、一緒に考える。表現は「昨年通りの教えられた型」から「思いを乗せた生徒たちにしかできない表現」へと深まっていきました。

## (2)地域の課題へ飛び込む！ 1年生「熊野をつなげ隊」の躍動

組曲「筆の都 くまの」で表現することを自分事にするためには、その背景にある「地域(熊野町)」を深く知る必要があります。そこで、令和5年度まで全学年が参加していた組曲を2・3年生だけで取り組むことにしました。1年生は、総合的な学習の時間に「熊野をつなげ隊」を結成し、学校を飛び出して地域課題の解決に取り組みました。

### ① 老人ホームでの「健康体操」

あるグループは、「高齢者に元気を届けたい」という問いを立てました。しかし、単に訪問するだけでは意味がありません。彼らは施設の職員にインタビューを行い、「座ったままできる運動が限られている」という課題を発見しました。

そこで考案したのが、「健康体操」です。高齢者の方に笑顔になって欲しいという想いを胸に、手首や肩を動かすオリジナルの体操を開発し、入所者と一緒に実践しました。

「孫が来たみたいで嬉しい」喜ぶお年寄りの姿に、生徒たちは「地域の役に立てた」という確かな手応え(自己有用感)を得ました。



### ② 議会を動かす「提言」

また、「交通安全」に着目したグループは、フィールドワークで危険な通学路を調査。その結果をまとめ、子ども議会で「街灯の増設」を提案しました。中学生ならではの視点とデータに基づいた提案は、役場職員や議員を唸らせました。



これらの活動を通して、生徒たちは気づきます。

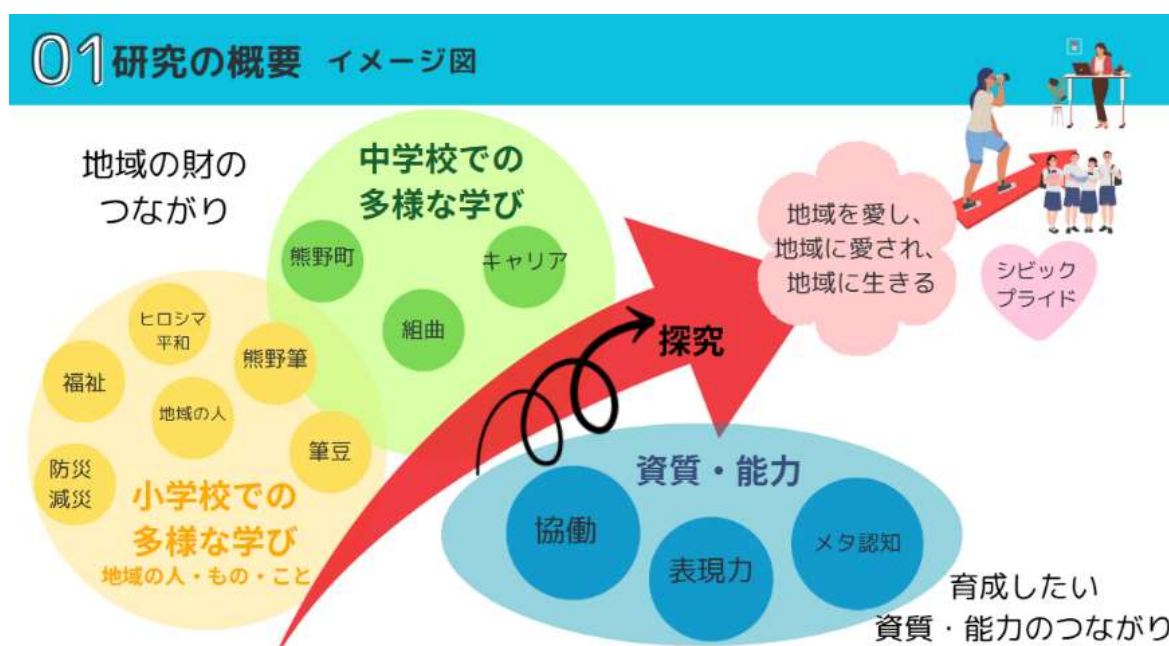
「熊野って、いい町だな」「もっと自分たちにできることがあるんじゃないか」

この地域への愛着(シビックプライド)こそが、組曲の表現に魂を吹き込む最大のエネルギーとなります。

### (3)9年間を見通した系統的な学び

熊野中学校区では、小中学校9年間を通じて「メタ認知」「協働」「表現力」を育成することを目指しています。令和6年度から月に1回程度、1中学校・2小学校の校長や総合的な学習の時間を中心となって推進する教員が集まり、児童生徒の様子や実践を交流する機会を設定しました。

こうした小学校での「地域を知る・課題に気づく」学びを土台に、中学校では「地域に関わる・貢献する・継承する」学びへと発展させています。小中の学びが分断せず、系統的につながることによって、生徒の中に深く確かなシビックプライドが育まれています。



第一小学校の児童が協働している場面



第三小学校の児童がフィールドワークしている場面

### 3. 実際の授業のワンシーン

#### 第3学年「私たちの組曲の再創造」(総合的な学習の時間)

##### ～「なぜ？」から始まる生徒の変容～

それぞれのパートで組曲を「自分を表現できる場所」と再定義し、自分たちが伝えたい思いを表現する場へと変化させました。

##### ・踊りパート-意味を問う身体表現-

「組曲の踊りって、何を伝えようとしているの？」ある生徒の素朴な疑問から、踊りパートの探究が始まりました。それまで、楽しさや上達を目標に、先輩の振付をなぞることばかりに懸命になっていた生徒たち。「知りたい」という想いを原動力に、タブレットや図書室の資料を活用し調べ始めました。そして、元郷土資料館館長さんに話を聞きたいと動き出しました。すると、熊野町に450年以上前から伝わる神楽踊りと組曲の音に関連性があることや、筆産業が盛んになる前は農業が中心だった歴史的背景が見えてきました。「筆のイメージだけでなく、大地の恵みへの感謝も込められているんじゃないか。」生徒たちは自分たちなりの解釈を見つけ、踊りに新たな魂を吹き込んでいきました。



神楽踊りと組曲の音の関連性を確認している場面

##### ・太鼓パート-協働を問い直す表現-

「太鼓だけが目立ちすぎていないだろうか。」昨年度の振り返りで出た一言が、太鼓パートの探究の始まりでした。それまで、迫力や力強さを追い求め、自分たちの音をどう響かせるかに意識が向いていた生徒たち。「組曲全体の中で、太鼓はどんな役割を担っているのか」と問い直し、他パートの音や動きを見つめ始めました。プレ発表での気付きも手がかりに、話し合いを重ねながら演奏の在り方を見直していきました。すると、強く打つこと以上に、仲間の音を支え、全体を一つにまとめることに価値があると気付きます。「主役になるのではなく、響きをつくる存在でありたい。」生徒たちは協働の意味を捉え直し、太鼓の音に新たな役割を見いだしていきました。

### ・篠笛パート-存在意義を問う表現-

「篠笛は、組曲の中でどんな役割を担っているのだろう。」その問いから、探究が始まりました。進んで取り組む生徒がいる一方で、戸惑いを感じていた生徒もいます。その違いがあったからこそ、「自分たちは何を担っているのか」を確かめたいという思いが生まれました。「ほかの楽器で代えられないのだろうか。」と問いを立てたグループは実際にリコーダーでの演奏を試し、響きの違いを比べました。さらに、地域の方への聞き取りや資料調査を通して、神楽を源流とする和の響きが組曲の世界観と結びついていることに気付きました。「本物の音を知りたい」と講師を自分たちで探し、来校を依頼したグループもありました。また、「音が小さい」という課題には、立ち位置や見せ方を工夫することで応えようとしていました。問い続ける中で、生徒たちは「篠笛だからこそ担えるものがある」と実感していきました。生徒たちは篠笛の存在意義を自分たちの言葉で確かめ、その表現を未来へつなごうとしています。



篠笛とリコーダーを同時に吹き音色を確かめている場面

### ・書道パート-言葉で意味を紡ぐ表現-

「組曲の中で、書道は何を伝えるのだろう。」その問いから、書道パートの探究が始まりました。それまでお手本をもとに文字を書くことに意識が向いていた生徒たち。組曲の成り立ちや他パートの思いを調べ、実行委員会で話を聞く中で、自分たちが“言葉で思いを届ける役割”を担っていることに気付きます。「どんな言葉なら、この思いが伝わるだろう。」文字に込める意味を考え、声や動きとのつながりも意識しながら表現を工夫していきました。生徒たちは言葉を選び、紡ぎ直す中で、組曲の価値を自分たちなりに語ろうとしています。

### ・吹奏楽パート-地域の記憶をたどる表現-

「この旋律は、どこから生まれたのだろう。」楽譜を読み解く中で生まれた疑問が、吹奏楽パートの探究の出発点でした。調べていくうちに、熊野に古くから伝わる麦打ち唄が組曲に取り入れられていることが分かりました。地域の歴史や人々の暮らしに目を向ける中で、音楽が営みと結びついていることに気付きます。「意味を知らずに演奏していてよいのだろうか。」生徒たちはリズムや構造の理由を考え、自分のパートの役割や他パートとの重なりを見つめ直しました。すると、正確に演奏すること以上に、地域の情景や願いを音で語ることの大切さが見えてきました。生徒たちは旋律に込められた記憶をたどりながら、自分たちの音で物語を紡ごうとしています。



探究したことを地域の方に発表している場面

## 4. 生徒の変容と教師の意識改革

### (1) 生徒の「当事者意識」の劇的な向上

生徒の探究的な学習活動に対する肯定的な回答の割合は劇的に上昇しました。特に現2年生（昨年度の1年生）において、総合的な学習の時間で自分で課題を立てて情報収集・発表に取り組んでいるかという質問に対し、肯定的な評価の割合が昨年度6月の38.4%から、今年度6月には91.0%へと、52.6ポイントも上昇しました。

これは、地域課題の探究活動（1年生の「熊野をつなげ隊」）を通じて地域との接点を持つ経験が、生徒の地域に対する肯定的な感情や主体的な探究意識の向上に貢献したと考えられます。生徒たちは、組曲や地域活動を探究の対象とすることで、「地域の人々の努力や願いが込められている」ことを理解し、「自分たちが地域の歴史の“つづき”を生きている」という自覚を持つに至りました。

### (2) 日常の学びへの波及

組曲での探究サイクル（課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現）は、日常の学びにも波及しました。例えば、合唱祭の目標設定において、クラスの中でアンケートを取り、歌詞やアンケートの回答を整理・分析して新たな課題を設定し改善を繰り返すなど、生徒が探究のサイクルを日常的に回す姿が見られるようになりました。

### (3) 教員の意識改革と「学習する組織」の構築

生徒の探究を支えたのは、教員自身の意識改革でした。教員は当初、「昨年度通りにやればいい」「昨年度通りでないなら、どうしたらいいかわからない」という声がある中で、「先生たちが探究しないと子どもは探究しない」という共通認識に至り、「学習する組織」の構築を推進しました。

- 授業研究の変革：管理職や一部教員のみが参観する「一人一研究授業」から、年間3回の代表者授業を全教職員で参観・協議する形式に変更。
- 各教科での探究要素の導入：総合的な学習の時間だけでなく、国語、社会、保健体育など、各教科でも探究の要素を取り入れ、授業改善につなげました。

## 5. 先生方の声・インタビュー

～「探究×ふるさと学習」で変わる子供と教師の姿～

—「探究×ふるさと学習」の取り組みを通して、子供たちにどのような手応えを感じていますか。

**武内 教諭(研究推進):**

かつては、私たち教員自身が「伝統を崩してはいけない」というプレッシャーを感じ、生徒に型通りの指導をしてしまいがちでした。しかし、生徒が「こなしている」姿を見て、「自分たちのものと思えなければ、本当の継承(伝統)は途絶えてしまう」と気づいたのです。

そこで、「なぜ受け継ぐのか」という正解のない問いを生徒に投げかけ、対話を促すファシリテーターへと教員の立ち位置を転換しました。すると、子供たちは「地域の人のために」という想いを、自分なりの言葉や表現で語り始めました。生徒が主体的に動き出すと、教員も「一人の指導者」から「チーム」へと変わります。

また、カリキュラム・マネジメントの視点を取り入れたことで、それぞれの教科で探究の要素を経験しながら培った力が、組曲で展開される生徒一人一人の探究にどう生きるかが可視化されました。教科の学びと探究がつながり、子供たちが「自分たちの力で伝統を更新できる」という手応えを感じている姿に改革に踏み切った意味を感じています。

——学校全体で取り組む意義について教えてください。

**三原 校長:**

本校が位置する熊野町は「筆の都」としての誇り高い文化を持っています。しかし、その伝統にあぐらをかくのではなく、子供たちには「これからの地域を創るのは自分たちだ」という当事者意識(シビックプライド)を持ってほしいと願っています。

20年以上続く組曲「筆の都 くまの」は、単なる行事ではなく、本校の教育活動の核(コア)です。1年時の地域課題解決学習から積み上げてきた探究のスキルとマインドが、この組曲で結実します。

学校全体でこの「伝統の再創造」に取り組むことは、子供たちに「変えられないと思っていたことでも、自分たちの手で新たな価値を生み出せる」という強烈な原体験を与えることとなります。この自信こそが、予測困難な社会を切り拓く力になると確信しています。

## 6. 終わりに

熊野中学校の挑戦は、22年続く伝統行事という「変えにくいもの」を、あえて探究のメスを入れることで「新たな価値を生むもの」へと進化させた実践です。

生徒たちは、組曲の再創造を通じて、単に伝統を守るだけでなく、その意味を問い直し、自分たちの色を加えて未来へつなぐという、真の意味での「継承」を体験しました。「自分たちが地域の歴史の続きを生きている」。そう語る生徒たちの表情は、自信と誇りに満ち溢れています。

古い器(伝統)に新しい水(探究)を注ぎ、器そのものも磨き上げる。熊野中学校の実践は、伝統行事を抱える県内の学校にとって、大きな示唆を与えてくれるはずです。